

## 第76回応用物理学会秋季学術講演会シンポジウム 「地域・企業が連携したサイエンスコミュニケーション」開催報告

世話人 吉田雅昭（八戸高専）

本シンポジウムは、1.2 教育の分科企画シンポジウムとして、会期2日目の9月14日の午後に開催されました。本シンポジウムのテーマであるサイエンスコミュニケーションの広義は、科学者と科学者でない人たち（例えば、市民など）とがやりとりをすることですが、最近流行りの「サイエンスカフェ」などはその例です。また、東海地区の企業や地域では、長年に渡り、相互が連携したサイエンスコミュニケーションが活発になされていることから、その取り組みを学ぶ機会として企画しました。シンポジウムは、2件の招待講演と2件の一般講演により構成しました。初めに大脇健史先生（名城大学）より「サイエンスコミュニケーションのための東海地区における学会・地域・企業連携」と題した招待講演をいただき、今年で18回目となる東海支部のリフレッシュ理科教室等の理科啓発活動および科学館等と地域の密な連携と企業の協賛を得ながら理科教室への参画するための要点に関する非常に貴重な御講演となりました。続いて、浅原雅浩先生（福井大学）による「地域の核となる小中理科教員（CST）の養成と支援—学部生・院生・現職教員—」と題した招待講演が行われました。この御講演では、福井大学と福井県教育委員会が連携して取り組まれているCST（コア・サイエンス・ティーチャー）養成拠点構築事業について、CSTの初級、中級、上級別の受講者数や認定者数など具体的なデータを示しながら、その概要と具体的な取り組みが紹介されました。この他に、2件の一般講演では、丹羽隆裕先生（八戸高専）による「科学でまちづくり」—学生による地域貢献活動と科学教育、徳光聖茄さんら（千歳科技大）による「学生プロジェクトチームによるサイエンスコミュニケーション活動」の御発表がありました。どちらも、学生を主体とした各イベントや出前授業の継続的な取り組みをご紹介いただきました。会場は、80名程度の参加者となり、かつて地域のサイエンスコミュニケーションに携わった経験を持つ聴衆の共感を得て、質疑応答が大変活発に行われました。特に、運営組織や資金の捻出に関する工夫について質問が多かったように思います。これは、どの地域でも共通の問題であると思いますが、ご講演の方々それぞれが、各事業の必要性などの情熱や困難を克服するアイデアやご経験が豊富で非常に参考になった次第です。今回の本シンポジウムを通じて、一般講演発表者や聴衆の中の若い科学の担い手が、次世代のサイエンスコミュニケーションの牽引者となり、幅広い科学普及活動の可能性を大いに感じました。最後に、御講演を快く引き受けていただいた先生方とご来場いただいた多くの聴衆の皆さま方に厚く御礼申し上げます。